

3. 馬鍬

水を引いた田を掻きまわして土を砕き、平らにならして田植えができるようにする作業を一般には代掻きというが、摂津市域では牛に馬鍬を引かせて代掻きをした。

ウマグワ・マグワ（馬鍬）

A はウマグワで標準語はマグワ。台木は86cm、8cm間隔で8本の歯がつき、水田を掻きならす。台木の両端から B のような引手が付き牛に引かせたが、写真では欠く。

ウマグワで掻く

馬鍬は、タツ（縦）・横・もう1回の3回掻いた。土のキツイところは何回も掻いた。代掻きは田植えの前段階。よく掻けているとオトフ（お豆腐）のように手が入るが、掻き残したところは手が入らない。掻き残しをナマズといった。「誰が鋤いたんや、ナマズ残っとるやないか」と叱られた。牛もたいがいエラかったと思う。「ターッとケツ（尻）どって（どついて）あんた。こっちも早よしーたいし……」

はやった二丁掛

B は馬鍬の下にニチョウガケと呼ぶ均し用の桁をはじめたもの。桁の長さは176cmで左右それぞれ4本ずつの歯が出ているので歯数は本体と合わせて合計16本となり一挙に倍の幅を掻き均すことができる。なるほど「二挺掛け」である。仕上げ用で歯も木製。

C は「摂津国各郡農具略図」西成郡の「式丁掛」。明治から使われていたのだ。

D は『絵本通宝志』の代掻き場面。台木が長く歯数の多いナラシマンガを使っている。江戸時代の農書によれば農家は荒代掻きから均しまで2～3種類の馬鍬を持っていた。二丁掛は1台の馬鍬を荒代掻きから均しまで使えるようにした発明だったのだ。

古墳時代に伝来

A のような馬鍬は朝鮮半島、中国の南半分から東南アジアまで広く使われており、中国の長江（揚子江）流域の水田地帯で開発されたらしい。出土品も福島県から福島・山形県まで全国的にみられ、古いものは6世紀の古墳時代にさかのぼる。近くでは高槻市の市役所付近からも奈良時代のものが2点、堺市からも6世紀の馬鍬が見つまっている。

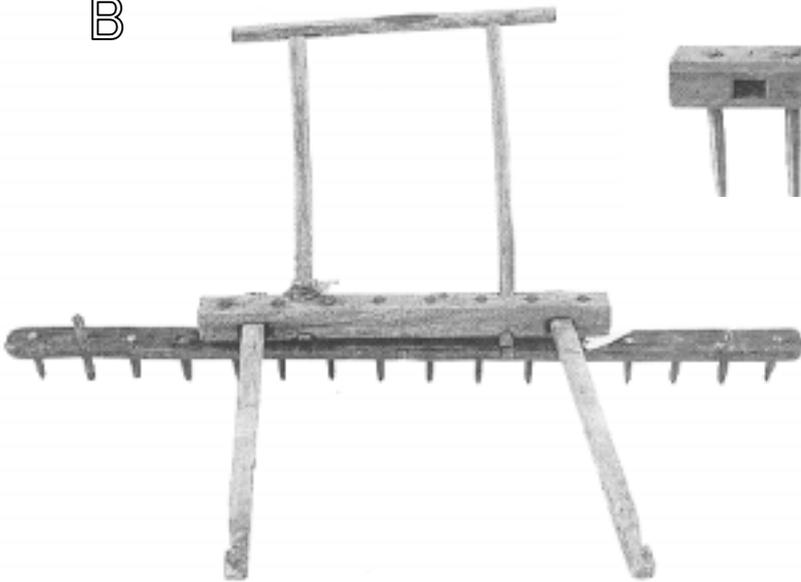
古墳時代の呼び名が残る

馬鍬は古墳時代に馬が引いたのでウマグワ（馬鍬）と呼んだらしい。その後は平安時代までは「うまくは」（ウマグワ）で中世には「むまくは」（ンマグワ）、近世江戸時代の農書ではウが脱落して「まぐわ」「まんが」が増える。摂津市域でウマグワ、ンマグワ、ウマグワ、ウマガと呼ぶのは、古墳時代以来の発音を伝えていたのである。

A

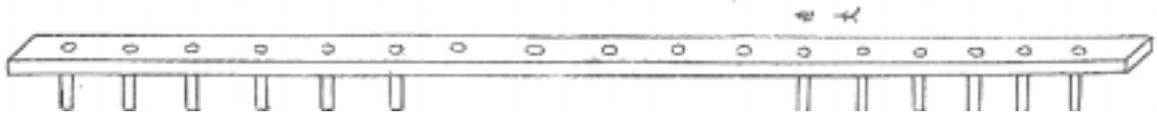


B



馬鉄
 古
 大
 部

C



D

